

大学史活動としての戦争展

明治大学の開催事情

一 展示活動の意義

今日、大学史活動にあって、展示が不可欠どころか、きわめて有意義であることは多くの人々が認めるところである。

ところで明治大学史資料センター事務室では、その前身・歴史編纂事務室時代に筆者は『明治大学史紀要』第一一号『明治大学百年史』編纂と「明治大学の歴史展」について」をはじめとして、『歴史編纂事務室報告』第二十三集「創立一二〇周年と明治大学史展」まで、大学史展について、報告したり、論じてきた。またセンター開設後は改題した『大学史資料センター報告』第二十六集（通号）において「明治大学史の展示」として特集をし、多くのページを割いた。

これほどまでに大学史展示に重点を置き、さらに展開をしようとしているのにはわけがある。実際、二〇〇二年度 明治大学規程第一〇号として制定された「明治大学史資料センター規程」の第3条には、展示について、次のように定められている。

第3条 センターは、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

(3) 資料の展示

(5) 展示場の管理・運営

さらに当センターでは、上記の学内基本法に基づき、二〇〇六年一月には「明治大学史資料センター利用要綱」を制定することにより、正式かつ本格的に資料を公開することとしたが、当然、そのためには閲覧業務だけではなく、展示による資料公開という業務も十分に含まれているわけである。また当センターでは、その目標を五点掲げているが、その第三番目は次のようである。

3、情報のサービス

このことの具体的な活動としては問い合せへの対応、展示や出版等によるサービス業務等々である。

これらの目標に基づき、当センターでは重点的な業務分野として三点ほど掲げているが、そのひとつに展示がある。具体的には、当センター事務室は学内では専用展示室のある神田駿河台の校舎アカデミーコモン内で常設展示、事務室のある大学会館ロビー内で小史展、和泉の中央校舎内ロビーで和泉小史展を開催している。また駿河台校舎のリバティタワー岸本辰雄記念ホールにおける各部署共同展示にも深く関わっている。さらに学外では創立者出身地巡回展と

して、創立者出身地の自治体と共同提携して展示に当たっている（創立者は三名ゆえ、三地区で。初年度は写真による導入展、次年度はモノ資料も含めた本格的な展示。計六年計画）。

しかし、いわゆる企画展・特別展（以下、「企画展」）の類は、上記小史展でそれらしきことをすることもあるが、ほとんど行なっていないといってよい。幸い、当センター常設展示室のあるアカデミーコモン内には、大学博物館管理による専用の企画展示室があり、しかも展示を募集しているため、企画展実現にさほど時間と手間を要しなかった。

二 本展示開催の契機

当センター事務室にとってははじめての企画展の開催に当たって、テーマ設定はいたってスムーズであった。それはいわゆる一五年戦争と明治大学に関することであった。この点は以前から、企画展を実施する場合には第一の候補としていたものであった。その理由と経緯をいささか年譜的に述べてみたい。

一九九六年（平成八）五月一六日夕方、帰宅するため筆者は、執務室（当時は歴史編纂事務室）を退出しようとしていた時、隣室の石川広報部長の案内によって一人の女性を紹介された。広島市から上京されたというその女性の名前は富樫直子と名乗られた。明治大学を卒業した実兄の遺品を受け取ってほしいが、分らないので、受付で聞いて広報担当をうかがったとのことであった。実兄とは後述する武石益則であり、その関係の資料をかかえてもってこられたのである。そのほとんどは明治大学の学生時代と学徒出陣による軍隊時代のものであった。さらにその際、また自宅にあるという手紙・

葉書類の私文書についても寄贈依頼をしたところ、心よく応じられ、七月一七日に郵送にて届けられた。さらに一九九九年（平成一一）六月一日、大学史料委員会（前身は百年史編纂委員会）の委員長加藤隆政治経済学部教授は広島出張の折、富樫家を訪問、聞き取り調査を直子氏と夫君隆夫氏（予科は明大）から行なったが、その際、写真などの追加資料も寄贈された。また、持ちきれない分は郵送で贈られた（六月八日着）。

この間、受贈資料の目録作成にとめたが、それと同時に、利用のことも意識しはじめた。前記した加藤教授は、『明治大学百年史』編纂時には、戦時体制下の学園について、担当された実績があった。そのため、完成した目録および資料を検討され、大学史料委員会『大学史紀要 紫紺の歷程』第四号（二〇〇三年三月三十一日）では「和泉予科の学風」と題し、武石益則が予科時代に記した日記により、予科の学生生活を紹介した。さらに広報紙『明治大学学園だより』第二八四号（一九九九年一月一日）では「学徒兵 武石益則の行動理念」（一九九九年一月一日）と題し、軍隊時代の日記を分析し、大学時代への思いをも紹介している。

なお、当時、明治大学の大学史活動に理解を示されていた有馬輝武（故人、元理事）は武石益則の資料にしばしば登場する正木蕃（親友）と予科以来の同期、かつ同じ特攻兵であったため、前出『大学史紀要 紫紺の歷程』第二号（一九九八年三月三十一日）で「同期の桜——第十四期予備学生の軌跡」という一文を綴っていた。

また一九九六年一〇月二六日から二〇〇〇年（平成一二）一月三十一日まで、大学会館一階ロビーにおいて、第三回明治大学小史展

「ある戦没学徒の生涯——政治経済学部生・武石益則——」を開催したのであるが、この経験は今回の展覧会の企画・実行に大いに役立った。なお、その前年、つまり一九九五年一月、本学生田校舎でも「戦争と教育」展がなされた。これは全国の総長による平和声明に基づくものであり、同一のパネルを関係大学で巡回して展示するものであった（主幹は後述する立命館大学）。本学では受入れの窓口は庶務課であったが、実務は歴史編纂事務室で担った。その際、とくに追加コーナーも設け、本学に関する戦争関係資料も展示をした。

三 本展示開催の準備（1）——先行展示の研究——

とはいえ、上記した本大学の小史展や巡回展の経験だけでは不十分であり、まずは先行展示の検討から入った。とくに近年では平和や戦争に関する博物館や資料館が多数、開設されている。しかもそれらは書籍（例えば『平和博物館・戦争資料館 ガイドブック』一九九五年四月二五日、青木書店、『世界の平和博物館』一九九五年八月二五日、日本図書センター、『人権をめぐる博物館ガイド』二〇〇三年一月二五日、解放出版社等々）やインター・ネット（ホーム・ページ）等によって容易に知ることができる。またそれらにより、展覧会も盛んになされていることも分った。

ところが大学設置の博物館、あるいは大学主催の展覧会となるときわめて少ないことも知った。しかも前者は、わずか一館にすぎず、それは立命館大学国際平和ミュージアム（一九九二年設置）である。「人間の可能性が豊かに花開く平和な社会の実現にむけて努力する」同館は「平和創造の面において大学が果たすべき社会的責

任を自覚し、平和創造の主体者をはぐくむ」という高尚な理念に応しく、施設面においても実際、常設展示室（地下一階、二階）や資料室を有する、かなり本格的な博物館であり、その活動も常設展以外に特別展、講演会等、さまざまな活動を行なっている。大学史活動における展示の企画・構成上、啓発されることが多々あった。とくに同館の活動から、観覧者に対して現実感を持たせ、主体性を持たせることの必要を痛切に感じた。

一方、後者の各大学における十五年戦争に関する企画展についても調査をした。以下、各大学の実績について、簡単に紹介したい。

東北大学（史料館）

東北大学史料館は第二次世界大戦終結六〇周年にあたる二〇〇五年（平成一七）の一月一日から翌年二月二十四日まで、「学徒」たちの「戦争」——東北帝国大学の学徒出陣・学徒動員——と題し、同館展示室で行なった。大学アーカイヴスを最初に立ちあげた同大学である。それに応しく、この種の展示でも全国大学アーカイヴスのさがけとなったのである。展示は学徒出陣と学徒動員に焦点をあて、堅実な内容構成となっている。

京都大学（大学文書館）

大学史活動を精力的に展開する京都大学大学文書館は二〇〇六年一月一七日から三月五日まで同館歴史展示室で、「京都大学における「学徒出陣」というタイトルで行なった。学内に関係資料が多くのことされたこと、さらに経費の措置も十分にとられ、かなり本格的な展覧会が実現された。そのため、展示終了後には大部な報告書で、調査研究の成果が発表された。

駒澤大学（大学史資料室）

特色のある展示活動をする駒澤大学大学史資料室は、第五回特別展を「戦争と大学」とし、二〇〇六年七月三日から九月二九日まで、同大学禅文化歴史博物館大学史展示室で開催した。十五年戦争下の駒澤大学について、学徒動員と軍事教練、学徒出陣に分けて、文書以外、とくにモノ資料の展示など、「見せる」展示につとめ、さらに駒澤大学以外についても一般性を有する出来事としてうったえた。

東洋大学（校友会）

同大学の校友会は創立一一〇周年記念事業のひとつに学徒出陣戦没者の調査を二年計画で進め、さらに二〇〇六年には「平和祈念の碑」を建立した。その間、二〇〇五年十一月一二日には白山キャンパスの白山スカイホールで「戦後60年・戦時下の東洋大学」展を開催した。日頃の地道な調査活動の成果を披露したものである。翌年にもほとんど同じ資料で再び展覧会を開催したことは、戦争を風化させないため、そして調査をさらに続けるために、きわめて有意義であった。

以上のような、先行的な常設展・企画展はきわめて参考となるとともに、戦争・平和の展示の必要性を一層強く感じることとなった。当センターでは、本展覧会開催の問題意識は大体持っていたつもりであるが、それでも、具体化・実践化する前に今一度、確認する必要がある。その結果は次の通りである。

(1) 忘れてはならない戦争と風化の危機の中で、開催することは社会的使命である。

(2) 戦時、つまり非常事態の中で、関係者、とくに学生なりに一杯したことは何かを解明し、展示すべきである。

(3) 戦争に関し、大学としても情報公開することは当然である。

四 本展示開催の準備——具体的業務——

以上の意識と気概により、しばらくして開催の挨拶文を作成した。

ごあいさつ

平和はあたりまえとされ、国際化、共生社会が叫ばれる現代ですが、この地球上では戦争が絶えないのも事実です。

この日本にとっても、有史以来の大戦争というべき、いわゆる十五年戦争（満州事変・日中戦争・太平洋戦争）が終結してから、六年が経ちましたが、戦後日本はまだまだそのことを忘れることができないのが実情です。というよりも忘れるべきではありません。

事実、当時、教育の世界では学問や教育は停止され、大学・高等学校・専門学校にあっては勤労働員どころか、ついには学徒出陣というきわめて異常な事態に陥るとともに、さらには貴重な命を失うことともなりました。

本展示では、こうしたことの事実について、明治大学を中心に紹介するとともに、現在、そして今後、私達はどのように考え、何をなすべきか、そうしたことの手がかりを提示させていただくつもりです。

本大学博物館の協力により、開催の時期と場所はスムーズに決った。会期は二〇〇六年（平成一八）七月一日から八月一八日、場所は博物館特別展示室となった。

それに向けて内容構成を急がねばならなかった。しかし、この年の一月からは鳥取市歴史博物館における明治大学創立者岸本辰雄展

(本展) 開催、同館の女性第一号弁護士中田正子展への協力、天童市図書館における明治大学創立者宮城浩蔵展準備と展覧会関係の業務が続いており、これらのことと調整しつつ、それでも四月以降は急速に準備を進めた。

まずは、当センターの所蔵する十五年戦争期の資料、とくに戦争に関わるものを中心に検討を進めた。この際、やはり明治大学百年史編纂による資料集(刊行物)は大いに参考になった。また前記した富樫家からの受贈資料は当然のように抽出した。

資料に基づき、資料を精査し、資料に語ってもらうことを大学史活動のモットーとする当センターは、展示の場合も例外ではなく、事務局全員この点にかなりの時間と労力を要した。

そして、ある程度、資料面の把握ができたところで、展示方法の策定に入ったが、結果として、以下の三点とした。

(1) 特色のある内容構成とする

- ・ 制度的一般事項を少なくする。
- ・ 人物を中心とするが、個人顕彰はしない。
- ・ さらにその人物の活動の中で、中心的なことに焦点を当てる。

(2) 観覧者に考えてもらう

- ・ 戦争展にありがちな悲惨さのみの強調、主義主張の押しつけに陥らない。
- ・ したがって最低限の解説情報の提供につとめる。
- ・ とはいえ特殊な戦時用語については、解説ピラを用意して、補足する。

(3) 大学史展ならではの展示につとめる

- ・ とくに大学、そして大学生を中心とする。

このことが確定すれば、テーマのネーミング、内容構成は容易となった。テーマは「明大生と学徒兵」とした。それでも一時は「明大生」と「学徒兵」のどちらを先にするか、検討したが、やはり前記三の(2)、(3)のことが決め手となった。さらにテーマや方法を十分に生かすためには、やはり富樫家寄贈文書は実に有効であることも再確認した。

こうして、第一部を十五年戦争と明治大学について、それをさらに太平洋戦争前夜と太平洋戦争下に区別し、全体の約三割を充当することとした。そして第二部は学徒兵について、ここは全てを富樫家寄贈資料とした。そして学徒兵武石益則の生涯を幼年時代、明大予科時代、学部時代、軍隊時代、最期と区分したが、展示全体の七割近くを当てることとなった。

ということは、本展示では武石益則が主人公的存在であった。中でも彼の学部時代の慰問演芸隊の活動はその後の軍隊時代の生活と関連付けつつ、本展示の中心的存在となった。とくに同人の資料には、モノ資料も含まれており、展示効果をあげることもなった。

このようになると、武石益則について、徹底した調査や研究が必要になり、そのため広島市在住の富樫氏には、幼少時の写真など、さまざまな追加資料の提供を願ったり、(結果として、これらのほとんどは寄贈していただいた)、あるいはデータの作成を願ったり、時には聞き取りもした。また、この間、武石益則と熊本予備士官学校時代に共に過した宮崎県延岡市の廣瀬富士男氏はわざわざ来室され、さまざまな資料を提供していただいた。

また、飯塚君子氏・同邦明氏ら、飯塚国五郎の子孫の方々が来室されたことも大きな刺激となった。飯塚国五郎とは当時、教職員や

予科生から慕われた配属将校であった。戦死後、子息の勝が肖像画を明治大学に寄贈、当センターに所蔵されていた。しかもその保存状態が良く、活用することとした。

こうして、武石益則のプロフィールについて、確定することができた。以下の通りである。

一九二一（大正一〇）年四月八日 出生（中国大連）

一九二八（昭和三）年四月 今治第一尋常高等小学校入学

一九三四（昭和九）年三月 山口県宇部市立神原尋常高等小学校卒業

山口県立宇部中学校入学

一九三九（昭和一四）年三月 山口県立宇部中学校卒業

一九三九（昭和一四）年四月 大倉高等商業学校入学

一九四〇（昭和一五）年二月 大倉高等商業学校中途退学

一九四〇（昭和一五）年四月 明治大学予科入学

一九四二（昭和一七）年三月 明治大学予科卒業

一九四二（昭和一七）年四月 明治大学政治経済学部入学

一九四三（昭和一八）年一月 明治大学政治経済学部仮卒業

一九四三（昭和一八）年一月 明治大学予科卒業

一九四三（昭和一八）年一月 明治大学予科卒業

一九四五（昭和二〇）年五月三十一日 戦死（フィリピン・ルソン島）

（注）武石益則実妹富樫直子氏作成のものに追記した

さらに第一部・第二部とも、いわゆる資料のしぼり込みがなさ

れ、後掲の記録資料の部にあるパンフレットのような編成となった。これにより解説文や「お礼のことば」等の執筆を急ぐこととなった。この段階で展示業者の選定や事務手続に入り、決定後は会場レイアウト、パネル・キャプション作成、展示用品の選定等々かなり技術的な段階に入った。そうして成った展示については、後掲の写真（図録）を参照されたい。さらにリーフレットの作成や補足パンフレットの作成も同時に進めたが、前者は印刷業者に依頼した。

五 課題・反省さまざま

本展覧会は本学にとって最初とあってよい戦争展であったが、開催時期が夏季であったこと、また鉄道駅に近い新校舎で実施したこと等々の好条件が重なり、多くの方々の観覧をいただいた。

しかし、不慣れな点もあり、課題とすべきことも多かった。とりわけ技術的な面では反省点が多々ある。ここでは以下の四点を記しておく。

（一）資料の劣化と展示

・全体として劣化資料により「黄色い」展示風景となった。

・これ以上の劣化を防ぐため、照明等に工夫を要する。

（二）読みにくい資料の提示法

・劣化したり、細かな文字の資料は拡大コピーや解説文を付したが、十分に徹底できなかった。

（三）壁面と展示台の展示バランス

・主に壁面は解説と写真のパネル、その前の展示台（通称「サイコロ」）は関係原資料を展示したが、位置の上で一致しない部分があった。

(4) キャンプシヨンの大きさ

・ キャンプシヨンの大きさは展示ケースのスペースを考慮して、手前のものと奥まった所のものとは変える必要があった。

(5) 案内人の必要

・ 受付所を設けて、会場で案内することにとめたが、特定の日以外は常駐できなかった。その分、博物館事務室に負担をかけることもあった。

以上のほか、資料の解釈はもとより、文章の作成や用語の使用等々、常々、日本近代史あるいは戦争・平和について、研究していなければいけないことを痛切に感じた。

出口の所には感想ノートを用意したが、思いのほか多くの方々が見意を書かれた。戦争や平和に対する考え方、展示の技術的なこと、あるいは自己の戦争体験について、小学生から年輩者まで、怒り・涙・警告等々さまざまであるが、ひとつひとつが感動的である。また本学学生も多くが観覧した(中にはゼミの一環として)。ことは、大学史活動をする私達にとってひとつの使命を果たしたような気もした。

またマスコミ取材の中で、毎日新聞はとくに「キャンパる」欄(二〇〇六年八月二一日付)で取り上げたが、「武石さんの最期に行くにつれ、切ない思いにかられた」という記事は印象に残った。

なお、富樫隆夫・直子夫妻はわざわざ広島市より、東京在住の実妹の久子氏とともに来観された。

同展示の終了後、二〇〇六年一〇月一四日、当室員を代表して、村松玄太と筆者は広島大学での全国大学史協議会全国大会研究会の帰途、しまなみ海道を渡り、愛媛県今治市の大三島に向った。目的

は同島に眠る武石益則の墓誌に参拝するためであった。野々江という集落のみかん畑の一角・共同墓地で瀬戸内海を見つめるように同人は眠っていた。その墓碑「武石家之墓」の横に姉千代(故人)の書により、次のような墓誌が建立されていた。

文通院釈小南居士

昭和二十年五月三十一日

植太郎 長男

行年二十五才

位記

正八位勲六等单光旭日章

陸軍少尉 武石益則

明治大学在学中学徒動員の令により昭和十八年十二月一日都城歩兵連隊に入隊昭和十九年九月十四日熊本予備士官学校に入校昭和二十年五月三十一日ルソン島ヤンギランに於て戦死す

昭和五十二年三月二十二日戦死地の霊石及生前愛用の遺品を益則の霊とし平成元年十一月五日武石家墓所に納む

老 父 万 涙

兎益則接戦死報 老父今日断腸感

応召出陣有遺文 尊重其意送余生

千代書

本展覧会の開催に当っては、富樫隆夫・直子夫妻をはじめ多くの方の御指導・御協力によった。また、当センター事務室の求めに応じ本展覧会に対する論考・感想・意見をいただいた(後掲)。深く

感謝するしだいである。本稿のむすびに代えて、展示パネルにした「お礼のことば」を記したい。

お礼のことば

戦争を、そしてそのことを大学史の中で取り上げることのむずかしさは、本展示を企画する段階から予測できました。実行してみると、案の定そのことを一層強く感じました。

それでも、今回あえて実行したのは、二つの理由によりました。ひとつは十五年戦争およびその時の教育のことが風化しているのではないのかということ、もうひとつは校友の方々（とくに戦争関係者）からの受贈資料をぜひ公開したためです。

まだまだ不十分な資料所蔵状況と展示ですが、今後の御指導と御協力により充実させたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

なお、本展示は多くの方々を受贈資料により成りました。とくに武石益則関係資料の多くは広島市の富樫隆夫・直子御夫妻によるものです。本日は御観覧ありがとうございました。

（付）

本文でも述べたように本展示は当大学史資料センター事務室全員で当たったが、直接には阿部裕樹（展示担当）と鈴木が担当した。なお、本稿の中には、後掲・記録資料の部と重複するものもあるが、行論上、あえて紹介した。